

全電源喪失の記憶

証言 福島第1原発

■第2章「1号機爆発」

4

3月12日午前9時24分、福島第1

原発1号機の格納容器ベントを成功させるため、E班当直長遠藤英由

(51)とE班当直長による突入チーム

第2班が中央制御室を出発した。目

指すは格納容器下部の圧力抑制室上

にある配管の弁だ。先頭の遠藤が手

ミゲルまで測れる線量計を首から下げ

た。放射線量が高い場所は、できるだけ避けるか、短時間で通過をしなければならぬ。ぐずぐずしていればあつという間に被ばく線量が上が

る。弁にたどり着くためのルートは綿密に検討し、頭にたたき込んでいた。

突入チーム、建屋地下へ



遠藤英由当直長が格納容器下部に突入した際に持っていたものと同型の線量計。上部のつまみで計測レベルを変えれば、毎時千ミゲルまで測れる

振り切る線量計の針

「結局は線量上の勝負だと思った

んです。それに時間上の勝負でもあ

った。一つの扉を開けるのに時間を

食うよりは、遠回りしても早く戻

れるルートを選びました」

遠藤は2階の制御室から1階に下

りてタービン建屋に入り、原子炉建

屋南側の二重扉の前に立った。地下

にある弁に行くには北側の二重扉の

高すぎる。

遠藤には三つの任務が課せられて

いた。「弁を開けること」「原子炉

建屋内の線量を調べる」と。最後

だ。

「建屋の中を懐中電灯で照らすと

湯気なのかほこりなのかもつもつ

とじていました」

行くしかない。小走りになった。

行くしかないと思っていました」

通路を北東の位置まで来た。弁ま

であと90度、距離にして約30だ。

遠藤は線量計を見た。

針が毎時千ミゲルを超えて振り切れ

ている。横向きの手柄を縦に

すると扉が開く。中に入って二目

の音なのか。線量計の針は毎時9

千ミゲルと毎時千ミゲルの間を行った

り来たりしていた。

圧力抑制室上に設置された「キャ

ットウオーク」と呼ばれる通路を進

む。目指す弁は南東にある。トナ

ツ状の圧力抑制室のちょうど反対

側、時計回りに180度回ら込むこ

とになる。「線量計の数値が見られるのは

行くしかないと思っていました」

通路を北東の位置まで来た。弁ま

であと90度、距離にして約30だ。

遠藤は線量計を見た。

針が毎時千ミゲルを超えて振り切れ

ていた。2、3秒凝視していたが、

もう針が戻ってくることはなかっ

た。2人そろって扉からトラス室に

入った。暗闇に「トラス・ドカン」

共通通信 高橋秀樹)